

〔原著論文〕

児童養護施設におけるセラピストの活動について

安田 勉¹⁾

Activities of psychotherapists in children's home

Tsutomu Yasuda¹⁾

Abstract

In 1999, psychotherapists was appointed to children's home in Japan for the first time. In many children's home, they don't know what a psychotherapist do, so they need information about the work of psychotherapists in children's home. The object of this study is to consider the work of psychotherapists in children's home based on my 8 years experience as psychotherapist in children's home.

As a result, it is suggested that we should be involved in the following 3 activities as psychotherapists.

- (1) to support the relationship between children and care workers.
- (2) to be concerned with care workers as consultants.
- (3) to improve care worker's mental health.

(J.Aomori Univ.Health Welf.3(1):89-95, 2001)

Key words:activities of psychotherapists, children's home, consultation

1. 問題と研究の目的

児童養護施設（養護施設という名称は1997年の児童福祉法の改正に伴い、児童養護施設に改められ、虚弱児施設が児童養護施設に移行された。）は、乳児を除いて、保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせてその自立を支援することを目的とする施設である。1999年12月1日現在、施設数553ヶ所（入所定員33,780、在籍人数28,863人）である。児童福祉法改正の前に行った1992年度養護児童実態調査によれば、在籍児童は26,725人（男子57%、女子43%）であり、子ども達の養護施設への入所理由は表-1の通りである。そして、子供たちに関わる職員の配置割合は表-3の通りである。また、最近では、虐待の増加に伴い虐待を受けた子ども、知的障害を持つ子ども、心理的な困難を背負った子どもなど、多様なニーズを持って入所してきている。その結果、児童養護施設では、今まで以上にこれらの多様なニーズに対応することが求められている。その具体的な取り組みの見

通しは、全国養護施設協議会が検討した「養護施設の近未来像」報告書（1995）を通して知ることができる。

子どもは家族と一緒に生活できないことや家族と離れることの不安を含め、様々な思いを持って児童養護施設での生活をはじめ。集団での生活では、子どものその思いが問題行動となって表れてしまうことがある。子ども達の気持ちを受けとめ、子どもの様々なニーズに対応し、子どもが安心して、健康的に生活できるように援助するために様々な取り組みがなされているが、特に、児童養護施設の長年の懸案であった「心理療法を担当する職員」（サイコセラピスト）の配置が1999年4月に可能になった（非常勤）。A園では1992年からサイコセラピストを配置しており、筆者が、当初よりサイコセラピストを担当している。⁽¹⁾

そこで、今までサイコセラピストとして行ってきた経験や職員へのアンケート結果をもとに、児童養護施設におけるサイコセラピストの活動について検討したい。

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

Department of Social Welfare, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

表一 養護施設における養護問題発生理由別

入所児童の構成割合 (単位 %)

	昭62年('87)度 調査結果	平4年('92)度 調査結果
総 数	100.0	100.0
両 親 の 死 亡	7.5	4.7
両 親 の 行 方 不 明	26.3	18.5
両 親 の 離 別	20.1	13.0
棄 児	1.3	1.0
父(母)の長期拘禁	4.7	4.1
父(母)の長期入院	11.5	11.3
虐待・酷使	2.9	3.5
放任・怠だ・父母の性格異常	11.5	9.7
そ の 他	14.3	34.2

表二 養護施設在籍児童年齢別割合

6歳未満	15%
6歳～11歳	38%
12歳～14歳	24%
15歳～17歳	19%
18歳以上	3%

「養護児童等実態調査」1992年12月1日、国民の福祉の
動向2000年

表三 職員の児童に対する配置割合(1994年現在)

児童：職員＝2：1(3歳未満)
4：1(～就学前)
6：1(小学生以上)

2. 施設の概略

A園は明治35年に開設された大舎制施設で、居室が男子棟(2一中高校生棟、小学生棟)、女子棟(2一中高校生棟、小学生棟)、幼児棟に分かれ、それぞれの居室単位に生活が営まれている(年度によって変更がある場合がある)。定員は110人。尚、2001年4月に改築され、定員は80人となった。

3. 入所児童とA園が抱える課題

子どもたちは、様々な家族状況を背景に児童養護施設に入所している。生活は大人数による集団生活であり、表一や職員の勤務体制を考えると小学生以上であれば、子ども約20人に職員1人の割合となる。職員は子ども達への日常の生活援助に加え、保護者との連絡調整、卒園した子ども達への援助、他機関との連絡調整等様々な取り組みを行っており、忙しい生活を送っている。さらに、入所してくる子ども達の中には心理的困難を背負っている子どもも少なくない。具体的には、知的障害、多動、言葉の遅れ、反社会的な問題行動を持った子どもなどである。このような状況の中で、職員には子供たちのニーズに応えるべく、より専門的な関わりが求められている。

4. 活動の経過

活動の内容が、職員の配置や担当者の考えの変化などによって変化しており、概ね3期に分けられるので、それぞれの期ごとに説明する。サイコセラピストの活動は、基本的に月2回1日2時間であった。サイコセラピストとしての活動が開始されるまで、職員のサイコセラピストの活動への理解を深める目的で研修を2回行った。第1回が「養護施設とカウンセリングについて」、第2回が「長期入所児童の問題について」であった。

第1期(1992年4月～1996年3月)

月2回(隔週一土曜日)の活動で、主な活動内容としては、1回は園内研修(全体)、症例検討会または処遇会議(担当パートごと)での処遇についてのスーパーバイザー活動である。他1回は、子どもとの面接、検査(特に乳幼児の発達検査)を行うことであった。

初年度は処遇会議が中心であったが、1993年からは処遇会議及び症例検討会が中心となった。居室は男子が2パート、女子が2パート、幼児棟が1パートの計5パートがあり、居室パートごとに処遇会議・症例検討会が行われた。職員が今悩んでいる事柄について話し合いたいとの要望で、できるだけ処遇会議・症例検討会を行うことになった。

園内研修は職員の要望に沿ってテーマを設定した。第1期に行った園内研修テーマは表四の通りである。幼児を担当する職員から高年齢児を担当する職員のそれぞれの要望に応える意味から、多様な内容となった。園内研修会では、セラピストからの話題提供を基にして子ども達への援助をどうするかという視点から話し合われた。

子どもとの面接では、情緒障害児短期治療施設(以下、情短施設と略す)での実践に学び、生活援助と心理的援助が矛盾しないよう心がけた。すなわち、セラピストとの面接が子ども達の様々な困難の逃げ場にならないようにし、子どもができるだけ担当職員との関わりで困難を解決するように面接を進めた。

表四 第1期に行われた園内研修内容

年 月	研 修 テーマ
1992.6	子どもに将来の目標をどう立てさせるか、生活意欲との関係で
1992.7	発達検査について
1992.10	不登校児の処遇について
1992.12	性教育の取り組みについて
1995.7	乳幼児の言語について

第2期(1996年4月～1999年3月)

月2回(隔週一金曜日)の活動で、主な活動内容とし

ては、1回は園内研修（全体）または症例検討会への参加、他1回は処遇会議（担当パートごと）でのスーパーヴィジョン活動、ないしはコンサルテーション活動である。この期は、子どもとの面接は行わず、もう一人の嘱託セラピストが子どもとの面接を行っており、面接の様子については処遇会議で報告するという形をとった。

またこの期は、スーパーヴィジョン活動からコンサルテーション活動への移行期として位置付けられる。この期はもう1人の嘱託セラピストが日常的に子ども達、職員と関わっており、園内研修を行う時間を多く取ることができた。第2期の園内研修の内容は表－5の通りである。知的な障害を持っている子ども達が多くなり、知的障害や発達の遅れについての研修が4回行われている。

表－5 第2期に行われた園内研修内容

年 月	研 修 テーマ
1996.5	治療的環境の形成と生活場面面接について
1996.10	男子棟職員全員で話し合う
1997.1	高齢児の処遇について
1997.2	職員と子どもの信頼関係を築くには
	学力向上につながる園での学習の取り組み方法は？
1997.3	児童指導員と保母のあり方について
1997.5	盗み・虚言への対応
1997.6	A園の職員になって思うこと
1997.7	虐待を受けた子どもへの心理治療について
1997.9	知的障害を持つ子どもへの援助—卒園後の生活を見通して
1997.10	動きを見よう、表現しよう」人間関係の距離のとり方、観察するという事について
1997.11	知的障害について
1998.2	長期入所の子どもについて
1998.6	発達の遅れの見られる子どもへの接し方
1998.9	発達の遅れを持つ子どもの進路について
1998.10	子どもの発達について
1998.11	言葉の指導について
1999.2	ソリューション・フォーカスト・アプローチについて

第3期（1999年4月～2000年3月）

月2回（隔週—金曜日）で、主な活動内容は、園内研修（全体）、症例検討会および処遇会議（担当パートごと）でのコンサルテーション活動である。すなわち、養護の専門家である職員の要請に応じて、心理臨床を専門とする者が一緒に考えるという活動である。1999年度からは年間統一テーマを決め、園内研修・症例検討会を持った。1999年度のテーマは「感情のコントロールがでにくい子どもへの対応について」で、特定の子どもの対象に継続的な対応を検討した。

処遇会議は、各パートが月1できるように回数を増やしている。園内研修は「虐待を受けた子どもへの対応に

ついて」の1回だけであった。

5. アンケートの結果とその考察

過去8年間の嘱託セラピストの取り組みに基づいて、職員の方々にアンケートをお願いした。尚、アンケート用紙は資料として添付してある。

まず、職員の勤務年数については、5年以下が6名、6～10年が5名、11～15年が2名、16～20年が2名、21年以上が3名である。新任職員からベテラン職員まで満遍なく在職している。

表－6 園内研修で役に立った内容（複数選択）

研 修 内 容	数
虐待を受けた子どもへの対応について	13
ソリューション・フォーカスト・アプローチについて	8
長期入所の子どもについて	6
職員と子どもの信頼関係を作るには	6
盗み・虚言への対応について	6
発達の遅れを持つ子どもへの進路について	6
治療的環境と生活場面面接について	4
高齢児の処遇について	4
発達の遅れを持つ子どもへの接し方について	4
子どもの発達について	3
不登校児への処遇について	2
乳幼児の言語について	2
児童指導員と保母のあり方について	2

園内研修で役に立った内容については、表－6の通りである。特に、「虐待を受けた子どもへの対応について」、「ソリューションフォーカスト・アプローチ」、「長期入所の子どもについて」、「子どもとの信頼関係を作るには」など、今困っている事柄についての研修が特に参考になったとのことである。情報や知識の獲得の場として、また子どもへの関わり方のヒントを得る場として機能しているようだ。勤務年数の違いで検討してみると、15年以上勤務している職員が多く選択している内容は、発達の遅れについてであった。発達の遅れや知的障害を持った児童が多くなり、その児童への生活援助の仕方に苦慮していることが伺える。

次に、これからの研修で取上げてみたいことでは（自由記述）、「社会性や自立性をどう育てるか」が多かった。また「今までの研修を繰り返したり、掘り下げる」や「実践で役立てられること」と言う意見もあった。他のところでも見られたが、子ども達の関わり・実践で役立てられる内容や討論を求めている。

園内研修の回数については、今まで通り、月1回で良いと言う意見が78%であった。

処遇会議で話し合うべき内容については、主に「子どもの問題の解決方法」「子どもと職員の人間関係」「子ど

もの生活の様子」「職員のストレス」であった。日々子ども達の関わる職員が子ども達との関係に苦慮し、何とか良い関わりを持ちたいという思いが伝わってくる。そして多くの職員がそのことにストレスを感じていることが伺える。処遇会議の運営の仕方については、今まで通り、パートごとに主任が司会をする形で進めるのが良いという意見が67%あったが、全体でしたほうが良いのではないかという意見もあった。また処遇会議の回数については、今のままで、隔月に1回の割合で良いという意見が56%であったが、月1回が良いと言う意見も約40%あった。

セラピストの常勤化については、全員が要望として持っている。

また、セラピストが配置されるようになってからの変化については（自由記述）、「様々な知識や技術が得られるので役に立った」、「相談できる対象があることによる安心感」、「視野や考えられる幅が広がった」、「ストレスが軽減された」等の意見があった。これらの意見は、学校に導入されたスクールカウンセラーに対する評価と共通する。

要望については（自由記述）、「入所児童に対しての面接があればよい」、「職員のストレスや悩みの軽減のためのアドバイス」、「実践例をたくさん聞きたい」、「個人的な相談の場を設けて欲しい」、「常勤化し、各部屋の子どもの様子を見ながらアドバイスして欲しい」、「来園回数を多くして欲しい」などの意見があった。特に入所児童との面接については、第3期に、もう1人の嘱託セラピストが退職し、いなかったこともあり、このような意見が多かったと考えられる。常勤化や来園回数を増やして欲しいという要望と合わせて考えてみると、日常的にコンサルテーションを行うセラピストの配置が強く求められている。また、職員のストレスや悩みの軽減のためのアドバイスを求める意見が多かったことは、子ども達との関わりの中で仕事をする職員であれば当然であり、職員の精神的健康の維持・増進は重要である。職員の精神的健康が保たれてこそ、子ども達も安定した生活ができる。今まで、「子どものために」が前面に出るあまり、職員の精神的健康はあまり注目されてこなかった。今後、セラピストの取り組みの重要な柱として職員の精神的健康の維持・増進を心がけたい。

6. 考察

子ども達は表1のように様々な理由によって家族から離れ、児童養護施設での生活を始める。生活においては、家庭においてと同じように、日常生活の中で様々なことが起きる。しかし、家庭が同一構成員で構成されている集団なのに対して、児童養護施設は、子ども達の入

退所、職員の移動を含め、毎年構成員が変化する生活集団である。ここに、生活上発生する困難の多さに対応の難しさがあるように思われる。だからこそ職員には子どもたちを養育する上での様々な知識、子どもたちへの思い、養育技術などの専門性が求められる。

しかし、職員の献身的な努力にも拘らず、職員配置など児童養護施設を取り巻く制度上の問題もあり、子どもの養育上の困難に十分に対応できない状況が見られる。1999年に制度化されたサイコセラピストの配置はこの困難の解決に向けての対応の一つとして位置づけられるだろう。

（1）活動日数および内容について

筆者は月2回の活動であるが、制度化されたサイコセラピストの配置は「おおむね週5日」となっており常勤に近い。したがってその活動は情短施設におけるサイコセラピストの活動に近い。具体的に厚生省通知では心理療法を担当する職員の業務内容として、1心理療法、2生活場面面接、3児童養護施設職員等への助言及び指導、4処遇検討会議への出席、5その他、が挙げられている。これらの業務を行う上で大切な視点は、あくまでも直接処遇職員（保育士や生活指導員など）と子供たちとの生活を基本にし、両者の生活をサポートし、直接処遇職員へのコンサルタントとして活動することだろう。そうしないと、かつての情短施設のように子どもが直接処遇職員とセラピストとの間で右往左往しかねない。かつての情短施設では、生活指導員は「子どもがセラピストのところに逃げて困る」といい、セラピストは「生活指導員は子どもの気持ちを大事にしない」といい、それぞれの独自性を主張しあった。その結果、それぞれの専門性が子どもに対して必ずしも有効に作用しなかったことがある。筆者の月2回の活動は時間的に制約されたものであるからこそ、直接処遇職員と子どもたちの生活を基本にしたサポート活動になったと言える。厚生省通知での「3児童養護施設職員への助言及び指導」は専門家同士の相談活動であるコンサルテーションとした方がよい。あくまでの子どもの養育に責任を持つ専門家としての主体性を尊重することが大切である。第2期において、コンサルテーションという考え方の重要さに気づいたからである。その後の職員のセラピストへの相談数の増加や主体的な研修・処遇会議運営はそのことを物語っている。

（2）スーパーヴィジョンからコンサルテーションへ

サイコセラピストを引き受けた当初から第2期は、情短施設での経験や様々な相談活動の経験があることから、スーパーバイザーとしての役割を取っていたように思われる。その結果、どうしても指導的な立場をとって

しまい、指示や指導してしまうという結果になりがちであった。このことは、結果として、ある種の依存関係を作ってしまったように思われる。そして、子どもに違う立場で関わる専門家として「共同する」ということが困難になるように思われ、また自分の意図するところとも違うように思われた。月2回で何ができるのだろうか。どんな風に役立ててもらえばよいだろうか。そんな自問の中からコンサルテーション活動を意識し始めた。第3期は、子どもたちと生活を共にする養護の専門職である職員の要請に応え、心理臨床を専門とする者として、情報を提供したり、一緒に考えたりするという共同作業者としての役割を取るように心がけた。その結果、上述したように、職員のセラピストへの相談数の増加や研修・処遇会議の主体的な運営がなされるようになっていく。

(3) 職員の精神的健康を保つために

アンケートの結果、職員のストレスや悩みの軽減のためのアドバイスを求める意見が多かったことは上述した通りである。この件については、筆者はあまり意識していなかった。子ども達との関わりの中で仕事をする職員であれば当然であり、職員の精神的健康の維持・増進は重要である。職員の精神的健康が保たれてこそ、子ども達も安定した生活ができる。すなわち、子ども達が生活する上での精神衛生的な雰囲気を形成することにつながる。今まで、「子どものために」が前面に出るあまり、職員の精神的健康はあまり注目されてこなかった。アンケートの後、リラクゼーションを目的とした臨床動作法を行ったり、個別の面接を意識的に受けることにした。今後、セラピストの取り組みの重要な柱として職員の精神的健康の維持、増進のための取り組みを心がけたい。

まとめ

児童養護施設では、子ども達の様々な困難の解決や克服のために「心理療法を担当する職員」(サイコセラピスト)の配置が1999年4月に可能になった(非常勤)。しかし、多くの児童養護施設でははじめての取り組みである。そこで、本論文では、児童養護施設におけるサイコセラピストの活動についての知見を提供することを目的に、児童養護施設における八年間のサイコセラピストの取り組みについて検討した。

その結果、次のことが重要であることが明らかになった。

- (1) 生活の主体である子ども達と直接処遇職員の関係をサポートすることを基本にして心理療法や面接を行うこと。
- (2) 直接処遇職員との関わりでは、スーパーヴァイザーとしてではなく、コンサルタントとして関わるこ

と。このことによって直接処遇職員の専門性を尊重することになり、専門化同士の協力で子どもへ援助がより有効になる。

- (3) 直接処遇職員の精神的健康の増進に務めること。
このことによって子ども達が生活する上での精神衛生的な雰囲気が形成され、生活上の安定をもたらす事に繋がる。

【注】

(1) 1991年(平成3年)4月11日「養護施設における不登校児の指導の強化について」の厚生省通達に基づいて、1992年4月1日より嘱託セラピストとして勤務している。尚、1999年4月30日「児童養護施設における被虐待児等に対する適切な処遇体制の確保について」の厚生省通達にともない前通達は廃止となった。本通知での心理療法を担当する職員の業務内容としては次の5点が挙げられている。

1 心理療法、2 生活場面面接、3 児童養護施設職員等への助言及び指導、4 処遇検討会議への出席、5 その他。

(受理日：平成13年10月2日)

参考文献

- 全国養護施設協議会 1995 『養護施設の近未来像』報告書 世界の児童と母性、Vol.39 | 1995-10 資生堂社会福祉事業財団 p33~41
- 安田勉 1995 情短施設の近未来像を読む 世界の児童と母性、Vol.39 | 1995-10 資生堂社会福祉事業財団 p 26~29
- 安田勉 1996 治療的環境と生活場面面接 全国情緒障害児短期治療施設研究紀要「心理治療と治療教育」第7号

謝 辞

本研究の発表に当たり、弘前愛成園園長葛西剛也先生よりご許可、ご協力を頂きました。また職員の皆さんにはアンケートにご協力を頂くとともにアドバイスを頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

〔調査用紙〕

弘前愛成園の職員の皆さんへ

調 査 の お 願 い

嘱託セラピストをお引き受けしてから8年が経とうとしております。子ども達や職員の皆さんにお役に立てているかどうかはなはだ心もとないところです。またこの間、児童養護施設に対する施策の変化に伴い、今年度から制度として児童養護施設にセラピストを配置することが可能となりました。このような状況の中で、嘱託セラピストのあり方をあらためて検討してみたいと考えております。

つきましては職員の皆さんに率直なご意見を頂ければ幸いです。皆さんがご回答下さいましたことは、すべて統計的に処理するとともに細心の注意を払い、ご迷惑をおかけすることはありません。

なにとぞ協力下さいますようお願い申し上げます。

2000年3月

嘱託セラピスト 安 田 勉

なお、ご不審な点、または疑問等がございましたら、なんなりと安田までお問い合わせ下さい。

問1 職種を教えてください。下記の番号の中から一つだけ選んで○をつけて下さい。

1. 指導員 2. 保母 3. その他 ()

問2 A園に勤務して何年になりますか(通算)。

年

問3 園内研修について伺います。園内研修で役に立った内容どのようなものでしたか。下記の中からいくつでも結構ですから○をつけて下さい。

- | | |
|------------------------------------|--------------------------|
| 1. 長期入所の子どもについて | 2. 不登校児の処遇について |
| 3. 性教育の取り組みについて | 4. 乳幼児の言語について |
| 5. 治療的環境と生活場面面接について | 6. 高齢児の処遇について |
| 7. 職員と子どもの信頼関係を作るには | 8. 児童指導員と保母のあり方について |
| 9. 盗み、虚言への対応について | 10. 虐待を受けた子どもへの対応について |
| 11. 発達の遅れを持つ子どもの進路について | 12. 発達の遅れを持つ子どもへの接し方について |
| 13. 子どもの発達について | 14. 言葉の指導について |
| 15. ソリューション・フォーカスト・アプローチ(短期療法)について | |
| 16. その他 () | |

問4 これからの園内研修で取り上げてみたい内容はどのようなものですか。

問5 園内研修の回数について伺います。適当と思われる回数を下記の中から一つ選んで○をつけて下さい。

- | | |
|------------------|---------|
| 1. 今のままで良い (月1回) | 2. 月に2回 |
| 3. 週に1回 | 4. 隔月 |
| 5. その他 () | |

問6 処遇会議について伺います。会議の内容として必要と思われる番号を下記の中からいくつでも結構ですから○をつけて下さい。

- | | | |
|--------------|------------------|----------------|
| 1. 子どもの生活の様子 | 2. 子どもの問題行動の解決方法 | 3. 子どもの家族 |
| 4. 学校について | 5. 職員のストレス | 6. 職員と子どもの人間関係 |
| 7. その他 () | | |

問7 処遇会議の運営の仕方についてはいかがでしょう。

- | | | |
|--------------|-------------|--------|
| 1. 今まで通りで良い。 | 2. 変えたほうがよい | 3. その他 |
|--------------|-------------|--------|



問8 問7で2、3と答えた方に伺います。どのような進め方が良いか御意見をご記入下さい。

問9 処遇会議の回数について伺います。現在、担当居室ごとに隔月に行っていますが、適当と思われる回数を下記の中から一つ選んで○をつけて下さい。

- | | |
|-----------------|---------|
| 1. 今のままで良い (隔月) | 2. 月に1回 |
| 3. 隔週 | 4. 毎週 |
| 5. その他 () | |

問10 今後、セラピストが児童養護施設に常勤職として必要でしょうか。適当と思われる番号を下記の中から一つ選んで○をつけて下さい。

- | | | |
|-------|----------|------------|
| 1. 必要 | 2. 必要でない | 3. その他 () |
|-------|----------|------------|

問11 セラピストが配置されるようになってどのようなことが変化しましたか。どのようなことでも結構ですからご記入下さい。

問12 セラピストへの要望としてどのようなことがありますか。なんでも結構ですからご意見をご記入下さい。

(御協力ありがとうございました。)